

## 近頃気になる日本語

木 村 光 子

「最近日本語がおかしい」という声が高まっているのではないか。読売新聞（最新日本語事情、正統編）や産経新聞（日本語に関する11の断層、正統編）で、日本語についての連載を組んでいるのがそのよい証拠といえるだろう。私も常々気にしてきたので、本稿ではそのいくつか気づいた点について述べる。

日本語がおかしい、と一口でいっても、問題点はいくつかに分類される。たとえばアクセントがおかしい（例、一時はやったカ<sup>レ</sup>シ）、イントネーションがおかしい（一時はやって定着した感のある中間語尾上げ）、文法的におかしい（すでに国民の7割以上が使っているとしか思えない見れる、着れる）、敬語の使い方がおかしい（一時期テレビのワイドショーのレポーターがさかんに使っていたご遺体とか身元不明の死体に対して遺体という）等々、さらに近年とみに気になる発音のおかしさ（本来日本語にない子音や母音が使われている）である。そこで、以下、各分類に従って気づいた点を記す。その前に、言語感覚について私見を述べる。

個人の言語感覚は、その人の育った環境に支配されるのだと思う。私についていえば、私は埼玉県北部（熊谷市の北、利根川流域）で生まれ育ったので、そこで話されているアクセント、イントネーションが日本語だと思い込んでいる。そしてこの思い込みは、東京方言に基づいて成立している「標準語」（たとえばNHKのアナウンサーの話すことば）と大差ないため、一層強固な信念となって私の中に存在している。従って、以下に述べることは、多分に私の偏見の結果となるかもしれないことが危惧されるが、その節は平に御容赦願いたい。

## 1. アクセントについて

最近どうも単語のアクセントが変だ。先に述べたカレシに代表されるように、単語の語尾を上げて発音することが多くなってきたように思えてならない。最近テレビでよく聞く例をあげると、ドラマ、モニター、サポーター、スニーカー、キャップ、ギャップ、ノズル、フリージング、バリエーション、リズム等々。なぜこうなってしまったのかを私なりに解析すると、以前、一部の女子高生が彼女たちの隠語としてカレシと言いだめたのを目ざとく（耳ざとく？）見つけたテレビ業界の人がこれをおもしろおかしく取り上げて放送した。それを見た若年層および中高老年層がバスに乗り遅れまいとまねをし始めた、という推測はどうであろうか。ドラマしかり、誰かが言い間違っただけでドラマと言ってしまった。たぶん違うアクセントはなんだか新鮮に響き、テレビ業界の人たちが使うようになって、それを見た人々が遅れていると言われたくないので使うようになり、燎原の火のごとく広まってしまった、のではないか。以下同じ、二音節目から上げて平板な言い方にする。トレーナー、ナレーター、等々外来語まで語尾上げするのが気持ち悪い。外来語は厳密に原音主義にすべきだ、とはいわないが、それにしてもこの気持ちの悪さは何とかならないものか。これらの外来語が輸入されたときからサポーター、ナレーターだったのなら何にも感じないが、明らかに、カレシ、ドラマと同調して変化しているから全く腹の立つことである。カレシにしてもドラマにしても、この現象の根底にあるのは、「自分自身で判断する」という意識のなさ、「バスに乗り遅れまい」という不和雷同性。みんながしているから私もして大衆の一員であることに安堵する気持ち、個性重視の教育が聞いてあきれる。しかし、この二音節目から調子を上げて、平板なまま終わることばをよく観察すると、圧倒的に外来語が多いが、本来のギターは[gitɑ:]であるにもかかわらず、ギターをギターと発音したのは聞いたことがない。このような言い方が広まったのは、おそらくB'z（ビーズ）という音楽グループが人気を博したことも一因なのではないか。また以前テレビで聞きかじったことだが、単語の語尾を下げて発音するとその言葉は「耳慣れない」と認識され、語尾を上げると「よく知っている」と認識されるということだ。これらのことから現在の語尾上げ平板調の流行の原因は、今までと違う言い方が新鮮な感じを与えると同時に、いかにもその言

葉に慣れ親しんでいるかのような響きを与えるために広まっているのではないかと推測する。テレビに出てくる人たちは、一生懸命語尾上げをしているが、緊張がゆるむとつい今までの言い方をしてしまう、という例をよく見かける。

## 2. イントネーション

先にあげた中間語尾上げに代表されるように、文章全体のイントネーションもゆらいできてる。国語学者の城生佰太郎氏によれば、日本語のイントネーションは平板化し、発音も簡略化されるということだから、アクセントの平板化もイントネーションの平板化も不可避なものかもしれないが、それにしても、その変化が急すぎはしないか。NHKのアナウンサーにしても変なアクセント、変なイントネーションで話しているのを聞くと、世も末のように思えてくる。このイントネーションの問題も、結局はテレビに原因があると思われる。もともと日本は大まかに分けると、関東と関西で異なるアクセント、イントネーション、発音の体系をもっていたのに、テレビの普及によって自分の生まれ育った言語感覚と異なる体系の日本語を聞くことによって、自分自身の言語感覚に自信がもてなくなってきたのではないか。その結果、何かがはやるとその是非について自分で判断せずに自分も流行に乗ってしまい、日本国中の言語感覚が揺らいでしまっているのではないか。

イントネーションに関して、最近とみに聞き苦しいのは「～で～、～で～」という具合に「で」や「て」をのばし、しかもその[e:]に高低の調子をつけることである。私くらいの年代では、話をするときには、よく「ね」を用いる。「それでね、……してね」という具合であるが、「ね」を長くのばすことは呼びかけ以外は普段はない。今の30代の人たちやそれより若い人はほとんど「ね」を使わない。私の娘も「ね」を使わず「～で～」「～して～」とやっているのだから、『ね』を入れなさい」と言うが全く効果がない。娘がもっと小さいときに気づいて矯正しておけばよかったと思うがあの祭りである。しかし娘より学年が4つ上の息子は「ね」をいれて普通に話している。しかも息子は「ら抜き言葉」を一切使わなかった。同じ両親の許で育ってもこのようなちがいが出るのは、子どもの性格のちがいもあるだろうが、女の子の方がギャングエイジ時代の仲間意識が強い

のではないか、というような想像をしてしまう。

「で～」 「て～」 という言い方がはびこる一因として、小中学校で教師が「よ・さ・ね」を追放したからだという話を聞いたことがある。たしかに「それでよ」とか「それでさ」という言い方は品位に欠けるが、「で～」や「て～」よりましなような気がする。「さ」や「よ」の追放はともかく、「ね」まで追放することはなかったのではないかなと思うが、どうして「ね」まで追い払ってしまったのだろうか。昔、全共闘の華かりしころ、彼らがハンドマイクを片手に「我々は——、～で——、断固闘うぞ——」とやっていたのを思い出すが、案外小中学校における「よ・さ・ね」の追放運動の担い手は彼らの話し方の影響を受けた人たちなのではないかと思うと、「よ・さ・ね」抜きで話す人たちの年代とも一致するような気がして私自身は合点がゆく。

### 3. 文法

文法的に誤っている用法の筆頭にあげられるのが「ら抜き言葉」の「見れる」「着れる」「食べれる」の類である。私が最初に「見れる」に直面したのは昭和41年に東京の大学に入学した時以降である。その時の友人の説明は、方言として「見れる」「着れる」を使う地方があるということだった。その後昭和60年ごろ（あまりたしかではないが、このころのような気がする）から、方言ではない「見れる」「着れる」を耳にするようになった。国語学者の友人によれば、“助動詞の「れる」「られる」には、受身・自発・尊敬・可能の四つの意味がある。若者たちの使う見れる、着れるは可能の意味に限って用いられている。すなわち言葉は一つにつき一つの意味が望ましいから、四つの意味を持つ言葉から、一つの「可能」の意味に限って「れる」に統一されるのは、言ってみれば「言葉の進化」であり、不可避な現象であるともいえる”とのことである。

個人的体験で申し訳ないが、私の娘が小学校3～4年生の頃（昭和63年から平成元年）突然見れる、着れると言いだした。ちょうどギャグエイジで、学校でグループ行動をする年頃だったので、ハハーと思い娘にきつく言い渡した。「見れる、着れるというのは正しい日本語ではない。お母さんはそういう言い方はきらいだが、学校でみんなと一緒にの時に使うのはかまわない。しかし、父や母、祖母、

学校の先生、長じて勤めてからの勤め先の上司に対して見れる着れるという言い方をしてはいけない」。その後娘は私の前ではら抜き言葉を使わなくなった。時々ポロッと使うことがあるがその都度注意している。

つい最近（平成14年）耳にしたのに「何気に」という言い方がある。元来「何気なく」と使われていたのを若い人たちが「ナニゲニ」というようになり、さっそく娘も私の前でこの言い方をしたので、ただちに注意した。「そういう日本語はない。ナニゲナクが正しい言い方です」。さすがにこの言葉は新聞や辞書などで「誤用だ」とさわがれてからあまり耳にしなくなったが、娘はまだ時々使って私の注意を受けている。

今テレビで、「攻めて攻めて攻め抜いた」という言い方のCFが流れているが（平成14年9月）ひどく聞き苦しい。本来同じ動詞を二つ重ねるときは「攻めに攻める」となり三つの時は「攻めに攻めて攻め抜く」となるべきであろう。15年くらい前に知り合いが「走って走って」と行ったのを契機に注意していると若い人たちを中心に中高老年まで「～して～して」と言っている。私は同じ動詞を二つ重ねるときは「動詞の連用形+に+動詞の連用形+て」と習ったのだが、他の人は習わなかったのであろう。私の子ども達が「走って走って」と言おうものなら早速私の「そんな日本語はありません。走りに走ってです」という雷が落ちる。

しかし文法の問題は、発音やイントネーションほどくずれやしくないといえる。むしろ、日本語の文法構造は非常に強靱であると思っている。たとえば語順についていうと、「私は本を読む」というとき、「私ね、読むの、あの本を」という言い方も可能であるし、状況によってはどんな語順も成立してしまうような気がする。いろいろな外来語を貪欲に取り入れ国語化してしまうのは日本語の構造が少しのことでは壊れない、いってみれば地震に対する柔構造のようなシステムをもっているためだと思う。たとえば現在よく使われている「サボる、ネグる（neglectする、無視する）」「スト権：ストライキをする権利」など、動詞化した、名詞の省略形にしたりして驚くべき柔軟性を発揮しているのは、日本語の文法の強靱さの表れであると思う。

文法的な面で最近気になるのは「とれたて」という言い方である。とれたての

魚、とれたての果物、という言い方を最近耳にするようになった。以前は「とりたて」が使われていたのに、なぜ「とれたて」が使われるようになったのだろうか。

「とりたて」は「とる」と「たてる」の合成語の名詞形で、とったばかり、とった直後を意味する。「とる」主体は人間である。「とれたて」は「とれる」と「たてる」の合成語の名詞形で「とれる」の主体は野菜、果物、魚等である。「～がとれたばかり」を意味するが、このような言い方がはやるのは後にも述べるように、動作の主体をなるべくあいまいにしようとする気持ちが働いているのではないかと推測する。

ら抜き言葉の次に気になるのは、これも最近ネコもシャクシも使っている「～させて頂く」という言い方。助動詞の「れる・られる」が、五段活用動詞とそれ以外の活用動詞に接続しているように、使役の助動詞「せる・させる」も「せる」が五段活用動詞の未然形につき、「させる」が五段活用以外の動詞の未然形につく。しかし最近この区別をつけられない人が多数出現している。だいたい「～させて頂く」などという言い方は、へたをすれば慇懃無礼な響きをもっている。それをろくすっぽ文法の知識もなく、日本語の音感も身につけてもいない人が無理に使おうとするから「せる・させる」の判断も付けられずに「使わさせて頂く」だの「書かさせて頂く」だの「やらさせて頂く」だのという惨状を呈することになる。それをまた大人が注意できない。大人も古典文法はいざしらず、口語文法を知らないから、何かおかしいと思いつつもそのおかしい理由を説明できないので黙っているのだろう。そしてやがて日本語及び日本社会はメルトダウンしていくのだろうか。

5～6年前ころだろうか。朝7時台のニュース番組のキャスターが「逮捕をされる」とか「暴行をされる」などという言い方をしていたのが耳障りでしかたなかったが（そのキャスターは広島県出身ということだが、広島の方では方言としてそういう言い方があるのだろうか）、最近ではずいぶん多くの人が「～をされる」という言い方をするようになり気になる。挙げ句の果てが「拉致をされる」ときたものだ。ここまでくると二の句も三の句もつけないではないか。もともと普通名詞にサ変（サ行変格活用）の「する」をつけて動詞化するのが普通だった

のが、最近は英語の影響だろうか、「～をする」という言い方がはやっている。その結果が「逮捕をされる」、「拉致をされる」ということになったのではないかな。私にとってはひどく気持ちの悪い言い方に聞こえる。

以前に江国滋氏が『日本語八つ当たり』という本の中で、「最近『～とする』という言い方が書き言葉の中にも出現するようになった」と慨嘆する旨のことを書いていたが、この「～とする」の多用には私も怒り心頭に発することしばしばだ。おそらくこの「～とする」という言い方の源流は古文に頻出する「～とて」に由来するのだと思うが、ものごとを断定することを避けようとする気持ちが働いてこの言い方が多用されるようになったのだと思う。新聞記事の中で「……が～としている」という文面を見ていると「断定しているのか推測しているのか、どっちなんだ」と叫びをあげてしまう。

「～とする」という言い方が広まってきたら、近頃は「～とされる」といういやな言い方が出てきた（例：～さんの娘とされる……）。私としては「～といわれている」といった方が自然に思えるのだが、これも行為の主体とその動作をあいまいなまに済ませようという気持ちの表れではないか。

#### 4. 発音

発音で問題になるのは、現在の日本語にない発音が日本語に現れ始めたことである。2年前に知り合いの声楽家が「最近の若い子は『ね～』を『[nə:]』と発音する」と言ったので、それ以降注意していると結構耳につく。主にテレビで「ジャリタレ」と言われている女の子や渋谷界隈を徘徊する女子高生とおぼしき人たちが多い。しかし、よくよく観察していたら、NHKの40代前半とおぼしき女性アナウンサーが、料理番組の中でさかんに「[nə:] [nə:]」と言っていたので驚いてしまった。気がつく私の娘も [nə:] に近い発音をしている。「私の娘が」と愕然とした。

私の娘も含めて（主として）若い女の子はなぜ [ne:] と言わずに [nə:] というのだろうか。おそらく二つの理由が考えられる。一つは、若い女の子は（おそらく男の子も）小さいときから柔かいものばかり食べてきたので口のまわりの筋肉が発達していなくて [a] [i] [u] [e] [o] の母音をきちんと発音できない

こと。もう一つは、これは女の子に関して特に考えられることだが、わざと甘えたものの言いにして母音をあいまいに発音すること。この二つが原因で [nə:] と発音するのではないか。そう思ってよく観察すると、けっこう若い男の子たちも [nə:] と言っているので、口の筋肉の未発達説は、私自身納得できる。

もう一つの発音の問題点は、日本語の [r] を英語の [l] で発音することである。よく日本人が「ご飯：rice」というと「シラミ：lice」に間違えられるというが、たしかに日本語の [r] は舌先が軽く上顎の歯の付け根に触れる。しかし、英語の [l] ほどべったりと歯の付け根につかない。しかるに最近、舌の先をべったり歯茎につけた「ら・り・る・れ・ろ」をよく聞く。若い子に多いが30代くらいの人もある。テレビで30代後半の男性アナウンサーが「l」音でラリルレロと言うのを聞くと気持ち悪い。この現象の原因として三つのことが考えられる。一つはサザンオールスターズの歌がはやったこと。このグループのボーカリストは日本語の [r] を [l] 音で歌っている。日本語の [ra, ri, ru, re, ro] より [la, li, lu, le, lo] の方が強く聞こえるので、このグループの曲を初めて聞いた人たちはきっととても新鮮に感じてまねをするようになった、と言うことが考えられる。二つ目として、中学校の英語の時間、英語の [r] と [l] を区別するために、特に「l」音が強調されて教えられているのではないか、ということ。三つ目は、二つ目と関連して、日本語の [r] よりも英語の [l] の方が発音しやすいのではないかということ。先に述べたように最近の若い人は口および舌の筋肉が発達していないから、軽い [ra] より重い [la] の方が発音しやすいのではないか。その結果、日本語の [ra, ri, ru, re, ro] が全部「l」音になってしまったと推測する。よく甘えたものの言い方の例として「舌足らずな言い方」といわれるが、これはよく観察すれば、舌の筋肉が未発達でしまりが無いということではないか。舌先を軽く歯茎につけられなくてベタッとつけてしまい、[l] 音で発音してしまうことや、舌が口の中でてきぱき動かないのでたどたどしい発音になってしまい子どもっぽい発音になってしまうことを称して「舌足らず」というのであろう。だから正確に言えば「舌足らず：舌が短い」のではなく、「舌にしまりがなくベロンと長い」ということではないか。



## 5. 敬語

現在の日本の経済状況は「デフレ、デフレ」と大騒ぎしているが、こと敬語に関しては超ド級スーパーウルトラインフレ状態といえるであろう。このインフレ状態はここ2～3年で顕著に進んだような気がする。気がついた言葉について順不同に列挙する。

### ○方々（かたがた）

単に「人たち」といえばいいと思うのだが、誰かが「方々」と言い始めたらあつという間に広がった。ひどいになると「容疑者の方」というのがあった。犯罪者（容疑者）の行動に尊敬の助動詞をつけて「～された」という例もしばしば見かける。

### ○夫妻、御夫妻

私の感覚では、夫妻とか御夫妻というのはある程度の社会的地位のある人たちに用いるものであって（例：大統領御夫妻等）、民間人には夫婦、よくって御夫婦というのが相場と思っていたが、現在では単なる市井の人たちも夫妻・御夫妻で芸能人にも使っているのはとても嘆かわしい。

### ○遺体・御遺体

これもテレビのレポーターという人たちが使いはじめたと思われるが、あつという間に広がって、今では「身元不明の遺体」という始末である。聞くとところによると、身元のわかっている人の遺骸が遺体で、身元不明の場合は死体というのだそうだ。しかし現在は、NHKをはじめとするほとんどの局のニュースで、「死体」という言葉は聞かれない。聞かれるのは「死体遺棄罪」というときくらいで、さすがにこれは法律用語だから遺体といいかえられないのだろう。

### ○頂く

自分が食べるときに、謙譲語として「頂く」を使うのはかまわないが、この「頂く」を丁寧語と勘違いしたのかなんでもかんでも、他人の動作にも「～して頂く」と連発する。料理番組に特に著しく、「～を焼いて頂いて、次に～して頂き、さらに～して頂き…」という具合に「頂く」のオンパレード。女性に限らず男性も頻発する。料理の紹介に際して「～して頂きますと大変おいしいです」という風に言われることもしょっちゅうある。なぜこんなことになってしまった

のだろうか。敬語の使い方は、まず、家庭での親の言葉遣いによって子どもに伝えられるものであろう。敬語の使い方は、相手と自分の立場の違いによって使い分ける、ということを、親が日常生活を通じて子どもに教え込むものであろう。私も子どもが小中学校に通っていたとき、心して先生の行為については敬語を使うように気をつけたものである（「先生はなんておっしゃったの？」など）。ところが「民主主義」の浸透により、敬語はナンセンス、という意識が蔓延したのであろうか、児童・生徒が教師に敬語を使わなくなった（正確には親が教えないから使えなくなったと言うべきであろう）—— こういう言い方を「ため口」と言うそうである。教師も、自分は人間的に生徒から尊敬されるほどの人物ではないと自覚しているのか彼らのため口を注意しない。むしろ子どもたちに仲間扱いされるくらい受け入れられていると逆に喜んでいるのかもしれない。かくして尊敬語も謙譲語も使えない不和雷同無芸大食（!）の烏合の衆の大量出現と相成った（東京都のゴミに集まるカラスのようだ）。それなのに現実には「丁寧語」の大洪水である。「大学生の方々」「（芸能人の）御夫妻」……。丁寧語のつもりで他人の行動につける「頂く」。尊敬語はどこへいってしまったのだろうか。

尊敬の意を表す言い方に「お～になる」という言い方があるが（お着きになる、お話になる）、最近はこちらもインフレで、お着きになられる（られるは尊敬の助動詞）、お話になられる、という始末。話し言葉が揺れるのは仕方がないと思うが、最近ここ2～3年の変化は、揺れの範囲を超えて、崩壊乃至溶融の段階に足を踏み入れた感がある。50代60代の人々が「見れる」「食べれる」と話すのを聞くと、日本はもうダメになってしまうのかと暗澹たる思いに駆られる。

## 6. 語彙その他

### ○濃い目、濃い口

かなり前から料理番組で気になっていたのが「濃い目、濃い口」という言い方である。私自身は「濃目（こめ）、濃口（こくち）」だと思うのだが。例えば「薄目、薄口」というが「薄い目、薄い口」とはいわない。私は形容詞の連用形に「目、さ、み」をつけて名詞化する、と習ったので（例：高目、高さ、高み、厚め、厚さ、厚み）、この例に従えばやはり濃目（こめ）、濃口（こくち）であろう

と思うのだが、料理番組で「濃目」といったら「米」と間違えられると思って「濃い目」というのだろうか。それとも戦前からこの言葉に限って「濃い目」とっていたのだろうか。

#### ○不倫

これはもう定着してしまったというか、以前の言い方をしらない人の人が多いというべきか。私が若いとき（昭和40年代）は不貞とか浮気といったと思う。それが、不倫という言葉がはやり始めたな、と思っていたら以前の言い方がすっかり追いつかれてしまった。不貞や浮気という言葉にはなにがしかのやましさ、自分は背任行為、うらぎりをしているという多少の自覚が感じられるが、不倫という言葉には自転車の車輪のように「くるくる回る軽さ」しか感じられない。だから好んで用いられるのだろうが無責任の極みである。

#### ○援交（援助交際）

これは売春である。だれが援交と言い始めたか知らないが、マスコミがおもしろおかしくとりあげて全国区の言葉になった。無責任の極みである。

#### ○感染症、STD（sexually transmitted disease）

以前「伝染病」と呼ばれていたものが、現在、公的文書では「感染症」である。以前の「伝染病予防法」や「性病予防法」等の法律が廃止され、平成11年4月1日から「感染症の予防および感染症の患者に対する医療に関する法律」が施行された。新法では伝染病という表現に変わって感染症という言葉が使われている。

この変化には、今までの「伝染病」という言葉にまわりつく偏見をなくそう、という意図があったとも考えられるが、デンセンビョウという重々しさが消え、カンセンショウという軽い響きしかなく、病気に対する警戒感が感じられない。その最たるものがSTDという言い方だ。日本語では性感染症と訳しているが、もともと日本には性病という言い方がある。しかし性病という言葉にはオドロオドロしい響きややましさを感じられ、それ故気をつけようという気になるが、STDとなると援交と同じで何の倫理観も感じられない。その結果が現在の性病の蔓延につながっているのではないか。

#### ○こととする、こととなる

ここ1年くらいのことであろうか、「～することとする」という言い方が出て

きた。以前は「～することにする、～することになった」、と言っていたのに、現在では半々の割合で使われている印象を受ける。～ことにする（なる）の方が軽快な感じ、～することは変化の一過程という意味が受け取れるが、～することとする（なる）という言い方は～することがある程度決着した最終的な段階というイメージで、そこで「～すること」は停滞してしまうというふうには私には受け取れる。いかにも仰々しく、わざとらしい言い方だ。この言い方は今までの述べてきた言葉の変化が軽い方へ軽い方へという流れであるのに対し、唯一その流れに逆行するものとして目を引いた。しかし、従来の発音と違った発音（に→とへの変化）によって耳新しい響きという点は共通している。

以上思いつくままに述べてきたが、本稿の目的は、書き言葉は残るが発音はテープに録らないと残らないので、いつごろ発音の変化が生じたかを、書き言葉ではあるが、できるだけ記録に留めようと思ったことである。そしてこのような変化がなぜ生じたかを私なりに分析すると、一口でいうと「衣食足りて礼節を忘れる」に尽きる。別の言葉でいうと国民としての価値倫理基準の欠如乃至消滅、よく言えば規制緩和。なんでもありの社会。そういう社会で「こうしなさい」と他人に強制したとき、「それはあんたの考えで、私は私の考えでいく」といわれたらおしまいである。いったいどうすればよいのだろうか。

大上段に構えていえば、今の日本で、日本人として何が重要であるかという国民の同意、一致した見解を築き上げ、それに沿って子どもを教育する必要があると思う。こういうと「この国際社会に日本人ということにこだわるなんて」という輩がいるだろうが、international というのは nation と nation との間という意味であるから、まず日本人を確立しなければ国際間で活躍する日本人はありえないことになる。江戸末期の遣欧使節の人たちは彼の地でとても立派だったと賞賛されたという話を聞く。彼らはおそらく通訳以外はほとんど外国語を話せなかったであろうが、それでも立派と評されたわけだから、外国語が話せるということは国際的に（外国人から）評価される条件の一つではないことがわかる。こういうふうにして、日本人を（私も含めて）外国語コンプレックスから解放しないと「小学生から英語を教えないとダメだ」という非国民・国賊（！）が出てきてし

まう。鈴木孝夫氏や中津療子氏は、12歳までに母国語をしっかり習得せよといっている。私もそう思う。中学の英語が発音重視になった頃から、若い人たちの日本語の発音が揺らいできたような気がしてならない。日本語の発音が英語の発音にひきずられてしまっている気がする。例えば、アマダレ（雨だれ）、アマアシ（雨足）というように下にくる母音によって上の母音に変化するが、この原則が若い人を中心にくずれはじめているような気がする。そしてすでに述べたように「1」音のラルルレロにネーと言わないで [nə:] という言葉等々。

思考のもと「言葉」であるから、まず、きちんとした日本語を子どもたちにしつける必要がある。日本人として習得すべき価値・倫理基準をきちんとした日本語で子どもたちに教え込む必要がある。

以上いろいろ述べたが、本稿では例としてあげた言葉以外はなるべく外来語を使わないよう努力したが、この作業は疲れた。外来語を使った方が楽なフレーズがたくさんあった（！）。本稿は私の手書きの原稿を娘がパソコンに入力してくれた。入力している途中、娘がいろいろ有意義なコメントをしてくれた。このコメントの内容も本稿に入れたかったが、このことについては別の機会に記したい。

本稿が、言葉の変化の定点観測の一助になれば幸いである。